

松 山 大 学 論 集  
第30巻第4 - 2号抜刷  
2018年10月発行

会 計 研 究 と 解 釈 学  
—— ガダマーの解釈学を中心として ——

川 崎 紘 宗

# 会計研究と解釈学

—— ガダマーの解釈学を中心として ——

川 崎 紘 宗

## は じ め に

会計に関する社会事象を研究するとき、対象となる事象を解釈する場合がある。なぜ解釈が必要だと考えるのか、また、その解釈は何をもって解釈したとされるのであろうか。社会科学の研究者は意識的に解釈の意味を定義しながら研究を行うことは少ないと考えられる。それゆえ、本稿では、H. G. ガダマー<sup>1)</sup>の解釈学を紐解きつつ、解釈とは何か、その一端を明らかにしたい。

## 会計学の研究と解釈学についての既存の研究

会計学について青柳 [1976] は以下のようにのべている。「簿記を履修して、財務諸表論や会計学の概説書を1，2冊も読めば、会計はわかったような気持ちになる。ひとかどの意見は言えるし、実務にもつける。それでよいとするならば、会計学ほど安易な学問はないであろう。ところが、会計をいまだ少し立ち入って考えようとすれば、たちまち思考の迷宮にふみ入ってしまう。こんなにむずかしい学問はほかにあるまいといった心境にもなる<sup>2)</sup>」さらに、青柳 [1991]

---

1) H. G. ガダマー (Hans-Georg Gadamer) は1900年マールブルク生まれの哲学者。マールブルク大学などで学び、1922年同大学でナートブルに師事し博士学位を、28年ハイデガーのもとで教授資格を取得。68年にハイデルベルク大学を退官するまで、マールブルク、ライプツィヒ、フランクフルト各大学の哲学教授を務め、占領下のライプツィヒ大学では学長の要職にあった。主著である『真理と方法』で展開された「哲学的解釈学」によって現代思想に大きな影響を与えている。2002年死去 (轡田・麻生・三島・北川・我田・大石 訳 [1986] 奥付参照)。

では会計について以下のように述べている。「会計とよばれる人間のいとなみは、世人の常識を超えた、会計人の通念をも超えた、思考の広がりと深さを求められる社会的行為である<sup>3)</sup>」

この点に言及して、國部〔1999〕は、伝統的な会計学の限界を乗り越えるために、青柳先生は、社会的行為としての会計の究明が探求対象としたとしている<sup>4)</sup>。さらに、國部〔1999〕によると伝統的な会計学は実在的思考と機能優先的思考<sup>5)</sup>であるとしているが、ここでは、実在的思考について考えてみたい。

実在的思考について國部〔1999〕は「会計システムおよびその測定対象がそれ自身で実体として独立して存在しているとする思考であり、そこから必然的に会計システムは対象を忠実に写像すべきであるとする規範が導出される<sup>6)</sup>」としている。そもそも、認識対象が認識プロセスから独立して存在しうるのであろうか。

例えば、給料を見たことがある人がいるだろうか。これは「名目勘定」であるので、給料を見たことのある人はいないはずである。見たことがあるという人は、おそらく貨幣である「現金」を見たのであって「給料」をみてはいないのである。Hopwood〔1990〕も同様のことをこのように述べている。「誰もいまだに原価や利益というものを知覚したことはない。それらは、抽象的で概念的な現象であり、人間の知性の創造物であり、経済的、社会的、制度的な力によって創出されるのである<sup>7)</sup>」。勘定についても、債権・債務を記録する「人名勘定」という形態から出現したと考えられている。この「人名勘定」における

---

2) 青柳〔1976〕3頁。

3) 青柳〔1991〕1頁。

4) 國部〔1999〕2頁。

5) 國部〔1999〕は機能優先的思考について以下のように述べている。「会計に要求されている機能と実践の対応関係を個々の会計現象自体とは独立に一義的に規定しているため、対応関係それ自体やその始原を探求する可能性を閉ざし、生き生きとした刻一刻と変化する社会現象として会計を捉える視点を失ってしまっている」（國部〔1999〕17頁）。

6) 國部〔1999〕15頁。

7) Hopwood〔1990〕p.9；國部〔1999〕15頁。

記録方法が、徐々に商取引上の物財や損益その他非人名商事事象に拡大適用されることにより、「物財勘定」と「名目勘定」が考案されるに至ったと考えられている<sup>8)</sup>。このように考えるならば、実務の中から生成・発展してきた会計システムは社会的・組織的コンテキストに依存していると考えられのではなからうか。それゆえ、國部〔1999〕は、「会計と社会の相互関係を分析対象とする学問的根拠が存在することになる」としている<sup>9)</sup>。

社会と会計の相互関係を分析する方法として、会計行為を営む人間か、あるいは会計現象が埋め込まれている構造<sup>10)</sup>を思考の起点とする方法が考えられるが、本稿では前者について考察する。この方法は、人間の主観的意味づけの観点から社会現象を考察しようとするアプローチであり、行為者の認識を支配し、これに客観的意味を付与する社会的なルールへも着目するもので、H. G. ガダマーの解釈学に基礎を置く方法である<sup>11)</sup>。

このようなガダマーの解釈学に基礎を置くアプローチを採った会計研究として、Lavoie〔1987〕と伊藤〔1978〕を示しておく。まず、Lavoie〔1987〕では、会計士は専門的判断を下すために、それを解釈の問題として扱うことを指摘している<sup>12)</sup>。また、伊藤〔1987〕では、予算研究を念頭に置きつつ、解釈学の思考が、既往のアプローチに対して、社会的規範や制度あるいは文化といったものが織り成す影響を考察し、その空白を埋めるという意味において補完的な役割を果たすと指摘している<sup>13)</sup>。

ここまで、会計学の研究と解釈について考察を進めてきたが、この会計学の研究手法の一つとして会計の歴史を研究する会計史という研究分野がある。

---

8) 中野〔2000〕8、9頁。

9) 國部〔1999〕16頁。

10) 人間の認知は社会的に形成されたものでもあるため、会計行為を営む人間を思考の起点とするアプローチを突き詰めていくと社会の構造の問題に突き当たると考えられている(國部〔1999〕24頁)。

11) 伊藤〔1987〕41頁；國部〔1999〕19-22頁；下田〔1987〕58頁。

12) Lavoie〔1987〕p. 581.

13) 伊藤〔1987〕42頁。

この会計史について中野・清水編 [2014] では、「会計史は、「会計」という人間の営む行為そのもののアイデンティティを時間軸に沿って再確認することであり、そのことによって、未来への展望を承けて過去を再解釈することを可能とするだけでなく、現在（と未来）の問題を考察するための視点を提供するもの<sup>14)</sup>」であると述べている。このように考えるならば、会計学の研究の一分野である会計史においても、社会と会計の相互関係を研究対象とするものであると考えられる。それゆえ、この会計の歴史研究においても、ガダマーの解釈学に基礎を置くアプローチは有効であると考えられる。

では、そもそも、H. G. ガダマーの解釈学とはどのようなものなのだろうか。以下では、この点について検討する。

## H. G. ガダマーの解釈学についての考察

### i. 解釈学の前史

まず、ガダマーは解釈学の発展の過程について概説している。ガダマーによると、解釈学は古典文学と聖書という伝承領域において、テキストの根源的な意味を技法にのっとった手法によって解明する動機から発展してきた。これら二つが一つの流れになるのは、ルターらによって人文主義的伝統が宗教改革の動機と結びつけられたからであった。彼らは、テキスト理解のための全体と部分の循環関係という古典修辞学以来よく知られていたものを理解の手順に転用し、テキスト理解のための一般原則として発展させた。つまり、テキストの個々の箇所は文脈、および全体が狙う統一的な意味から理解できるという原則である。プロテスタント神学は聖書解釈にあたってこの原理に準拠したために、この神学で教義づけられた前提にとらわれることになった<sup>15)</sup>

ディルタイによれば、このような解釈学が普遍的な意義を持つ歴史研究のオルガノン（方法論）へと高められるには、まず一度、あらゆる教義的な束縛か

---

14) 中野・清水編 [2014] (1)頁。

15) Gadamer [1975] S. 162-165；饒田・巻田訳 [2015] 294-296 頁。

ら解放されなければならなかった<sup>16)</sup> この解放が起きたのが、18世紀であった。ガダマーは、ここに至り、聖なる文章と俗なる文章のあいだの違いがなくなり、ただひとつの解釈学が存在することになったとしている<sup>17)</sup>

ここまで、ガダマーが考えるところの解釈学成立の前史について概観してきたが、そもそも、解釈学が必要となるのはなぜであろうか。この点についてガダマーは「解釈学の必要性は、まさに、おのずから理解が起こらなくなることにより生じてきた<sup>18)</sup>」としている。では、理解とは何であろうか。また、解釈とは何であろうか。ガダマーはハイデガーの『存在と時間』を基に自身の解釈学を展開している<sup>19)</sup> 以下では、ハイデガーの理解の循環構造についてのガダマーによる考察を概観する。

## ii. 解釈と理解

ガダマーはドイツ語における「理解」についての検討から議論をはじめている。ドイツ語では実践的な技能もまた「理解 (Verstehen)」と呼ばれる。それゆえ、「彼は読むことを理解していない」というのは、「彼は読むことに習熟していない」、つまり彼は読めないと同義となる。しかしそれは、学問で行われている認識のための「理解」とは、本質的に異なっているように見える。しかし、この両者には、なんらかの事柄への精通という意味の方向性があるとガダマーは述べている<sup>20)</sup> さらにガダマーは、「理解」というドイツ語の意味の歴史もまたこの方向を指し示しているとして、「理解」の法律的な意味、つまり、法廷の前で事案についてある立場を主張するということが、「理解」のもともとの意味であるとしている。さらに続けて、そこからこの語が精神的な意味に

---

16) Gadamer [1975] S. 165; 轡田・巻田訳 [2015] 296-297 頁, Dilthey [1957] S. 326, 331; 久野訳 [1981] 29, 40 頁。

17) Gadamer [1975] S. 165; 轡田・巻田訳 [2015] 297 頁。

18) Gadamer [1975] S. 172; 轡田・巻田訳 [2015] 306 頁。

19) 渡邊 [1994] 302 頁。

20) Gadamer [1975] S. 246; 轡田・巻田訳 [2015] 413 頁。

転じて用いられるようになったのは、法廷の前で事案についてある立場を主張することが、まさに、それを「理解」することを含むということから説明できる。事案を「理解」することは、つまり、相手方の考えられるあらゆる反論に対して対処の仕方がわかっていて、自身の法的な立場を認めさせることができるように、事案を自分の思うままに、自在に扱えるほどに精通しているということであるとしている<sup>21)</sup>

ガダマーは、この「理解」について、ハイデガーの理解の循環構造から解釈についての考察をしている。その際に出てくる概念が「投企」である。ガダマーはハイデガーの理解の循環構造に基づいて以下のように述べている。

「解釈者は解釈の途上でたえず、自分自身のほうから湧いてくる思いつきなどに惑わされているのであるが、肝心なのは、この誘惑をすべて切り抜けて事柄への視線を保つことだからである。テキストを理解しようとする者は、つねに投企（Entwerfen）を遂行している。解釈者は、テキストに最初の意味が現れるとすぐに、テキスト全体の意味をまえもって投じてみる（vorauswerfen<sup>22)</sup>）。だが、他方で、そのような最初の意味が現れるのは、テキストをすでに何らかの期待をもって一定の意味を目指して読むからこそである。もちろんそのような先行投企（Vorwurf<sup>23)</sup>）は、テキストの意味をさらに深く理解することによってえられた成果からつねに修正されるのであるが、そこに書かれているものを理解するとは、そのような先行投企を練り上げていくことなのである<sup>24)</sup>」

要約すると、解釈者は何らかの期待を持って一定の意味を目指してテキスト読んでおり（先行投企）、テキストの意味をさらに深く理解することにより得

21) Gadamer [1975] S. 246；轡田・巻田訳 [2015] 617 頁。

22) 注は著者挿入、原著では「Er wirft sich einen Sinn des Ganzen voraus」。

23) 注は著者挿入、原著では「Vorentwurfs」。

24) Gadamer [1975] S. 251；轡田・巻田訳 [2015] 423 頁。

られた成果から先行投企はつねに修正される。つまり、理解するとは、先行投企を練り上げていくことなのであるが、ガダマーは、この点について以下のよう続けている。

「先行投企がその都度修正されるには、意味の新しい輪郭が先んじて投げられている必要があり、また、意味の統一性がいっそう明確に確定されるまで、競合する投企が平行して練り上げられるのであり、そして、解釈は先行概念（Vorbegriff<sup>25)</sup>）から始まり、この概念は一層適切な概念によって置き換えられる。理解と解釈の運動を構成する、このような絶えざる新たな投企こそが、まさに、ハイデガーが記述している過程なのである。理解しようとするものは、事柄そのものに即していない先行－意見（Vor-Meinungen）によって惑わされる危険にさらされている。投企はそれらが投企である限り、〈事柄に即して〉はじめて確認されるべき先取りであるのだが、事柄に適切な、正しい投企を練り上げていくことこそ、理解の不断の課題である<sup>26)</sup>」

このようにガダマーは述べた上で、理解が投入する先行意見が恣意的なものでないときに、はじめて理解はその本来の可能性に達するのであるとし、どのようにすれば自分自身の先行意見の呪縛から脱するのかについてこのように述べている。

「解釈学的に修練を積んだものは、テキストの他者性に対する感受性をあらかじめそなえていなければならない。ただし、この感受性は客観的な〈中立性〉を前提とするものではないし、ましてや自己滅却を前提とするものでもない。むしろそれは、自分自身の先行意見や先入見を際立たせて

25) 注は著者挿入、原著では「Vorbegriffen」。

26) Gadamer [1975] S. 251-252；饒田・巻田訳 [2015] 423-424 頁。



真に自分のものにすることを含んでいる。肝要なのは、自分自身が先入見にとらわれていることを自覚することである<sup>27)</sup>」

ここでガダマーがいう先入見<sup>28)</sup> (Vorurteil) とは、事態を客観的に規定している諸要因すべてを最終的な仕方でも検討する前に下される判断である<sup>29)</sup>。ガダマーは続けて、裁判の審理において先行判断とは、本来の最終判決を下す前になされる法的な仮決定のことであったとしている。したがって、先入見は誤った判断のことではなく、それが肯定的にも否定的にも評価されうることが、その概念の中に含まれていると考えられる。しかし、この先入見という語は「啓蒙思想とその宗教批判によって〈根拠のない判断〉という意味に限定されてしまったように思われる<sup>30)</sup>」とガダマーは述べている。根拠づけ、方法的な確証があってはじめて判断に尊厳が与えられる。判断にそのような根拠づけが欠けていると、それ以外の確実性のありようは認められないので、その判断は事柄に根ざす根拠を持たないということになってしまう。これが合理主義の精神に基づく典型的な推論であって、先入見の信用失墜と先入見を完全に締め出そうという科学的認識の要求は、この推論に基づいているとガダマーは主張している<sup>31)</sup>。

この先入見についてガダマーは、解釈者があらかじめ自分から理解を可能にする生産的な先入見を、理解を妨げたり誤解に導いたりする先入見から区別できないが、この区別は理解そのもののなかで起きるはずであるとし、それを可能とするものが、時代の隔たりであるとしている<sup>32)</sup>。それゆえ、ガダマーは「あとの理解が作者における生産行為に対して根本的に優れていて、それ

27) Gadamer [1975] S. 253; 轡田・巻田訳 [2015] 427 頁。

28) 先入観に同じ (新村編 [2018] 1672 頁)。

29) Gadamer [1975] S. 254-255; 轡田・巻田訳 [2015] 428-429 頁。

30) Gadamer [1975] S. 255; 轡田・巻田訳 [2015] 429 頁。

31) Gadamer [1975] S. 255; 轡田・巻田訳 [2015] 429 頁。

32) Gadamer [1975] S. 279; 轡田・巻田訳 [2015] 464 頁。

ゆえ、よりよい理解（Besserverstehen）として定式化できる<sup>33)</sup>」理由について次のように論述している。

「どの時代も、伝承されたテキストをその時代の仕方理解するであろう。というのも、テキストは伝承の全体に属しており、各時代はこの伝承の内容に関心を持ち、この伝承によって自らを理解しようとするからである。解釈者に語りかけるようなテキストの本当の意味は、著者や同時代の読者のような機会的なものに依存してはいない。少なくとも、本当の意味がそうした機会的なものに汲み尽くされることはない。というのも、テキストの意味は、つねに解釈者の歴史的状況によっても、それゆえ、歴史の客観的な進行の全体によっても同時に規定されているからである<sup>34)</sup>」

このように述べた上で、ガダマーは、理解が、よりよい理解なのではなく、そもそも理解するときは別の仕方理解していることであるとした<sup>35)</sup>。さらに、時代の隔たりについて、「ある歴史的な連関が歴史学的な関心しかひかなくなつたところでは、一定の解釈学的要求がおのずから満たされるというのは、完全に真実である。そこでは、誤りを生むいくつかの源泉がおのずから排除されている<sup>36)</sup>」としている。しかし、それによって解釈学の問題が尽きているかという点、それは疑わしいとして、この時間の隔たりは、「事柄の中にある真の意味をはじめて完全に現れるようにする<sup>37)</sup>」としている<sup>38)</sup>。このように述べた上で、ガダマーはこの時間の隔たりが解釈にもたらす影響について以下のように述べている。

---

33) Gadamer [1975] S. 280；轡田・巻田訳 [2015] 464 頁。

34) Gadamer [1975] S. 280；轡田・巻田訳 [2015] 464-465 頁。

35) Gadamer [1975] S. 280；轡田・巻田訳 [2015] 465 頁。

36) Gadamer [1975] S. 282；轡田・巻田訳 [2015] 467-468 頁。

37) Gadamer [1975] S. 282；轡田・巻田訳 [2015] 468 頁。

「あるテキストないしは芸術的創作のなかにある真の意味を汲み出すことは、どこかで完結するものではなく、実際には、無限の過程である。時代の隔たりにおいては、つねに新たな誤りの原因が締め出され、その結果として、真の意味があらゆる濁りから濾過されるというだけではない。そこからはたえず新たな理解が湧き出し、予期しなかった意味のつながりを明るみに出している。時代の隔たりは、完結した広がりではなく、たえず運動し拡張している。時代の隔たりには、濾過という消極的な側面と同時に、この隔たりが理解に対してもつ積極的な側面もある。それは部分的にしか当てはまらない先入見を死滅させるだけでなく、真の理解を導く先入見そのものを現れるようにするものである<sup>39)</sup>」

このようにガダマーは、時代の隔たりこそが、解釈者があらかじめ自分から理解を可能にする生産的な先入見を、理解を妨げたり誤解に導いたりする先入見から区別できないという解釈学の問題を解決できるようにすると結論付けている。そして、この時間的隔たりは、解釈者に、過去の人達は現在の自分達とは異なった考え方や前提を持っている可能性があるという、歴史意識を持たせる<sup>40)</sup>。ガダマーは、歴史的な解釈学は、解釈者をテキストから分ける時間的隔たりをはっきりと意識的に橋渡しするとしている<sup>41)</sup>。そしてテキストに生じて

38) ガダマーに、一定の歴史的な隔たりがあってはじめて客観的認識が達成可能になるという観念をいだかせることになったのは芸術作品についての解釈の影響があった。ガダマーによると「時代の隔たりが確かな尺度を与えてくれないところでは、判断に独特の無力がつきまとうことは知られている。だから、現代芸術に対する判断は、学問する者の意識にとって絶望的なまでにおぼつかない。明らかに、そのような創作物に接近する際にわれわれが携えているのは、制御の効かない先入見である。この先入見は、それがどのようなものであるかを知るにはわれわれをあまりに全体的に占拠してしまっている前提であり、また、現代の創作物に、その真の内容や真の意義に対応しない過剰な共鳴を与えかねない前提なのである。アクチュアルな関連がすべて死滅してはじめて、創作物そのものの姿が見えるようになり、同時に、(ひとを拘束するような普遍性を要求しうる) そこで言われている内容の理解が可能となる」としている (Gadamer [1975] S. 281; 轡田・巻田訳 [2015] 466-467 頁)。

39) Gadamer [1975] S. 282; 轡田・巻田訳 [2015] 468 頁。

40) Gadamer [1975] S. 282; 轡田・巻田訳 [2015] 468, 667 頁。

いる意味の疎外を克服することによって、意味が正しく通用することに奉仕するとし、歴史学的な理解の本来の対象が出来事ではなく、出来事の〈意義〉であるとしている<sup>42)</sup>。ここでガダマーは、法解釈学から検討を加え、裁判官の例から解釈学と歴史学的な思考の橋渡しを行っている。

「裁判官が伝承された法律を現在の必要に合わせて適用するのは、たしかに実践的な課題を解決しようとしてである。しかし、そのような法律の解釈は、それゆえに、けっして恣意的な解釈の変更ではない。この場合も、理解し解釈することは、妥当な意味を認識し承認することである。裁判官は法律を現代に橋渡しすることによって、その法律が持つ〈法思考〉に込めようと努めるのである。たしかに、これは司法的な橋渡しである。法律の法定的意味－法の公布の歴史の意味とか、その法律が適用されたなんらかの事例ではなく－これこそが彼が認識しようとするものである。したがって、彼は歴史家として振舞うのではない。ではあるが、彼は自分と現在という自分自身の歴史にかかわり合う。それゆえ、彼は、裁判官として暗黙のうちにもっている問いに、つねに歴史家としても向き合うことができるのである<sup>43)</sup>」

では、歴史家が法律の歴史的な意義を究明しようとする場合はどうであろうか。その場合、歴史家は歴史学ばかりではなく、司法的にも考えることができないと、ガダマーは例示した上でこのように一般化している。

「歴史家は法律を、それが成立した歴史的状況から理解しようとするが、その法律が法として今なお及ぼしている作用をまったく無視することは

---

41) Gadamer [1975] S. 295; 轡田・巻田訳 [2015] 487 頁。

42) Gadamer [1975] S. 295, 311; 轡田・巻田訳 [2015] 487, 510 頁。

43) Gadamer [1975] S. 311; 轡田・巻田訳 [2015] 509 頁。

できない。つまり、こうした継続的な作用があるために、歴史家が歴史的伝承に対して立てる問いが与えられるのである。こうしたことは、実際のところ、どのテキストについても言えることではないだろうか。つまり、テキストはそれが語ることに於いて理解されなければならないのである。ということは、つねに置き換えが必要だということではなかろうか。すると、この置き換えはつねに現在への橋渡しとして行われるのではないのであろうか<sup>44)</sup>」

このように述べた上で、ガダマーは結論として「我々に届く伝承は現在のうちへと語りかけており、現在へのこの橋渡しのなかで－というよりはむしろ橋渡しとして－理解されなければならない<sup>45)</sup>」としている。

次にガダマーは文献学と歴史学を比較し、解釈学と歴史学を隔てる方法上の違いを考察することにより、両者の共通性を論述している。歴史家は、テキストを突き抜けて過去の一部を認識しようと努めるので、テキストを別の伝承で補ったり検証したりしようとする。歴史家から見ると、テキストを芸術作品のように見るのは文献学者の弱点とみなされる。ガダマーによると、文献学者は与えられたテキストの理解を実直に遂行するが、歴史学での解釈の概念は、表現の概念に対応しているとしている。ここでの表現は、修辞学の術語としての表現概念ではなく、表現によって言われていることばかりではなく、とりわけ、表現されるはずはなかったがそう言われることによって同時に表現されていること。つまり、表現がいわば漏らしていることであるとガダマーは述べている<sup>46)</sup>。

この広い意味での表現は、真相を探ろうとすれば背後に遡らざるをえないようなものすべてと、同時に背後に遡ることを可能にするようなものすべてを包

44) Gadamer [1975] S. 311; 轡田・巻田訳 [2015] 510 頁。

45) Gadamer [1975] S. 311; 轡田・巻田訳 [2015] 510 頁。

46) Gadamer [1975] S. 318; 轡田・巻田訳 [2015] 520-521 頁。

括している。したがって、歴史学では、意図された意味ではなく、隠されているながら、同時にそのベールを剥ぎ取らねばならない意味の理解を目指している。この限りで、ガダマーは、いずれのテキストの意味も理解可能というだけでなく、幾重もの観点から解説を必要としていると主張しているのである<sup>47)</sup>

このようなわけで、ガダマーは、歴史家にとって原理的に重要なのは、伝承はテキストが自ら求めているのとは別な意味で解釈されねばならないということであるとしている。歴史家はつねにテキストの背後へ、テキストが表現している意味思考の背後へと遡り、テキストが意図せずに表現してしまっている現実を問うのである。ガダマーによれば、テキストは文献学と異なり、歴史的物証、つまり、いわゆる遺物と同列に扱われる。それゆえ、テキストも他の資料と同じく、それが語っている内容からではなく、それが証言していることから理解されなければならないとガダマーは述べている<sup>48)</sup>

ガダマーは、ここにおいて解釈の概念は完成するとして、このように結論付けている。すなわち、テキストの意味が直接理解できないところでは、解釈することが必要になる。ある表現がそのまま表現していることが疑わしい場合はいつでも、解釈が必要になるということである。また、解釈は理解に後から必要に応じて付け加えられる行為ではなく、理解はつねに解釈であり、解釈は理解の顕在的な形である<sup>49)</sup>としている。

## ギデンズによるガダマーの解釈学についての考察

先に検討したガダマーの解釈学にギデンズ<sup>50)</sup>は考察を加えている。それによると、歴史的に遠く隔たった時代のテキストや、私たちみずからの文化とは

---

47) Gadamer [1975] S. 318; 轡田・巻田訳 [2015] 521 頁。

48) Gadamer [1975] S. 319; 轡田・巻田訳 [2015] 522 頁。

49) Gadamer [1975] S. 291, 319; 轡田・巻田訳 [2015] 481, 522 頁。

50) ギデンズは、二重の解釈学について議論している。社会学は、社会的行為者自体が意味の枠組みの中ですでに組成している世界を研究対象としており、日常言語と専門術語を媒介にして、こうした意味の枠組みを、社会学そのものの理論図式の中で再解釈していくものであるとしている (Giddens [1993] p. 170; 松尾・藤井・小幡訳 [2000] 276 頁)。

著しく異なる文化のテキスト理解は、「観察者が、相容れない存在態様にたいする洞察を通じて、他者の視座の把握によって観察者みずからの自己認識を高めていく、そうした本質的に創造的な過程である<sup>51)</sup>」。また、「理解」についても、「テキストの筆者の示す主観的体験の「内側」にみずからを置くことなく、ウィトゲンシュタインの用語を使えば、その主観的体験に意味をもたらす「生活形式」の把握を通じて書かれたものをきちんと受けとめ、理解することである。理解は、言説をとおして達成される<sup>52)</sup>」。したがって、理解は「相互主観性の媒介としての、また、「生活形式」なりガダマーが「伝統」と称することがらの具体的表現としての言語と関係している<sup>53)</sup>」と、ギデنز述べている。

また、すべての理解は、「歴史の中に状況規定され、特定の準拠枠や伝統、文化の内側からの理解であるとされ<sup>54)</sup>」。このように述べた上で、ギデنزには、解釈学の問題とは言語の正確な使いこなしではなく、言語を媒介にして達成される事柄の正確な理解の問題であるとしている<sup>55)</sup>。

さらにギデنزには、解釈学が、あらゆる研究形態に拡大適用されているとしている。「最も気軽な会話にはじまり、自然科学の研究装置に至るまで、前提条件に拘束されない研究形態は存在せず、こうした前提条件は、ただそのなかでのみ思惟が可能となる伝統の枠組みを表出している<sup>56)</sup>」。この枠組みについて、ギデنزは続けて、「この伝統の枠組みは、日々の生活においてであれ、著作物においてであれ、あるいは社会科学や自然科学においてであれ、一方でつねに私たちの思考や行動をまさに組み立てる生地であるとはいえ、絶えず変化の過程にある。したがって、解釈学は、「哲学の普遍的様態<sup>57)</sup>」であって、

51) Giddens [1993] p. 62; 松尾・藤井・小幡訳 [2000] 108 頁。

52) Giddens [1993] p. 62; 松尾・藤井・小幡訳 [2000] 108 頁。

53) Giddens [1993] p. 62; 松尾・藤井・小幡訳 [2000] 108-109 頁。

54) Giddens [1993] p. 63; 松尾・藤井・小幡訳 [2000] 109 頁。

55) Giddens [1993] p. 63; 松尾・藤井・小幡訳 [2000] 110 頁。

56) Giddens [1993] p. 63; 松尾・藤井・小幡訳 [2000] 110 頁。



「いわゆる人間科学の単なる方法論的基礎ではない」<sup>58)</sup>と述べている。

上記でギデنزも引用しているように、ガダマーによれば、解釈学<sup>59)</sup>は方法ではない。しかし、ギデنزは、これを方法の再構築のための含意とみなしている。筆者が書き記したものによってその筆者が意味する事柄を理解し、テキストがどのように受けとめられたかを理解しようとする企てと、そのテキストが私達自身の今日の諸状況に対してもつ意義を理解しようとする企ての間には相違がある。このような差異の認識は、解釈学を方法として復権させることになる。ギデنزも考えている。それゆえ、解釈学は、その中心となる問題領域を、書き記されたテキストそのものの理解ではなく、意味の枠組み全般の媒介の中に見出すべきであるとギデنزも主張している<sup>60)</sup>。さらにギデنزも続けて、「科学の理論は、他の「言語ゲーム」がそうするのと同じように、意味の枠組みを形成する。自然科学における「説明」は、他の研究領域と同じようにさまざまなかたちを呈している。自然科学における「なぜかの疑問」は、確かに必ずしも一般法則を思考するとはかぎらないし、その疑問にたいする答えもこうした法則性について何らかに言及することを必ずしも必要としているわけでない。人間の行為に関してそうであるように、「理解する」—つまり、意味の枠組みのなかで「理性によって知りうる」ものにする—ことは、多くの場合

57) 注は著者挿入。この「解釈学の普遍性」という主張に関して、ギデنزも、対立する哲学上の主要な二つの伝統である解釈学と実証主義の立場について記述している。解釈学的哲学の研究者たちによれば、人間のすべての行為は、「理解」されるべきであり、自然科学を特徴づける法則定立的なかたちの説明を受け容れない。他方、実証主義的傾向の強い哲学者の目から見れば、自然科学の論理形式は、おおまかに言えば社会科学においても当てはまる。とはいえ、ハーバーマースにとって、社会科学は解釈学的であるだけでなく法則論的でもあるので、批判理論によって補う必要があるとしていると、ギデنزも述べている (Giddens [1993] p. 65; 松尾・藤井・小幡訳 [2000] 112-113 頁)。ここで述べられている、解釈学と実証主義の立場の相違については今後の課題としたい。

58) Giddens [1993] p. 64; 松尾・藤井・小幡訳 [2000] 110 頁; Gadamer [1975] S. 451; 饒田・三浦・巻田訳 [2012] 814 頁。

59) ガダマーの解釈学について、意味の同等性についての前提が論じられていない点や過ぎ去った伝統を言葉で表せないことは、伝統を批判の対象とする可能性をあらかじめ排除している等の批判がなされているが、本稿ではそのような批判があるとの指摘にとどめる (Giddens [1993] p. 69, 72; 松尾・藤井・小幡訳 [2000] 118, 123 頁)。

60) Giddens [1993] p. 71; 松尾・藤井・小幡訳 [2000] 121 頁。



に、「説明する」こと、つまり、謎を「適切に」解き明かすために根拠や理由を提示することである<sup>61)</sup>」としている。

ガダマーの解釈学が主張する、言語を基盤として「先入見」を肯定する考え方は、実証主義的な傾向の強い社会理論学派では、そのような自己意識を、ほとんど評価に値しない邪魔者つつねにみなしてきたとギデنزは考えている。<sup>62)</sup>そして、ギデنزは、「自分のおこなうことからの理解は、他の人たちのおこなうことからの理解できることによって、つまり、記述ができることによってのみ可能となり、また逆に、他人のおこなうことからの理解は、自分のおこなうことからの理解をとおしてのみ可能となる。それは、感情移入の問題というよりは、むしろ意味論の問題である<sup>63)</sup>」と述べている。このギデنزの思考は、解釈学の手法を用いた研究が社会科学の研究領域でも有用であることを示唆しているのではなかろうか。

## お わ り に

本稿では、まず、解釈学的アプローチを用いた会計研究について言及した。続いて、解釈学的アプローチが基礎を置く、ガダマーの解釈学について概観した。ガダマーの解釈学は、「伝承」や「伝統」とガダマーが呼ぶ文字伝承、すなわち「テキスト」に先入見をもって対峙し、過去の出来事やテキストから影響されて、先入見に変化をもたらすというものである。そして、この変化が理解であり解釈であるとガダマーは考えていた。それは、テキストの意味が直接理解できないところでは、解釈することが必要になるからであるという点を指摘した。

次に、ギデنزがガダマーの解釈学について考察した内容を概観した。ギデنزには、ガダマーの解釈学から議論を進めて、理解すること、つまり、意味の

---

61) Giddens [1993] p. 75; 松尾・藤井・小幡訳 [2000] 128 頁。

62) Giddens [1993] p. 24; 松尾・藤井・小幡訳 [2000] 47 頁。

63) Giddens [1993] p. 25; 松尾・藤井・小幡訳 [2000] 48 頁。

枠組みのなかで理性によって知りうるものにすることは、多くの場合に、説明すること、つまり、謎を適切に解き明かすために根拠や理由を提示することであるとした。また、ガダマー自身、解釈学は方法ではないとしたが、ギデنزとは、ここに方法の再構築のための含意があるとみなした。その上で、解釈学は、その中心となる問題領域を、書き記されたテキストそのものの理解ではなく、意味の枠組み全般の媒介の中に見出すべきであるとのギデنزの主張について述べた。

ガダマーの解釈学の中で展開されている議論の前提は、テキストに書かれている内容をテキストが書かれた時代と同様の追体験をすることは不可能であるというものである<sup>64)</sup>。しかし、テキストが書かれた内容を、現代まで伝わるテキストの書かれた当時の考え方を踏まえて、現代の個々の視点から読み解くことはできるというものであると考えられる。それえゆえ、その際に先に述べたような先入見や理解、そして解釈に関する議論がなされるのである。

この前提について、ガダマーは「たしかに、歴史的客観主義は、過去になれなれしく近づいて過去を現代化してしまう勝手気ままな態度を、批判という方法によって根絶してしまいはした。だが、それに気をゆるして、自身が行う理解が導いている、恣意的でも任意でもない、すべてを担う諸前提を否認し、そのため、われわれの理解の有限性にも関わらず到達できるはずの真理を逸しているのである<sup>65)</sup>」という警告を発している。ここで、ガダマーは、手段と目的を取り違わないように注意するよう述べている。このガダマーの指摘は、先入見が、むしろ解釈学的な理解の条件であり、自他の二つの世界の地平を統合したより普遍的な認識の地平<sup>66)</sup>へと至る可能性があることを示唆していると考え

---

64) ガダマーは、存在は時間の中にあり、時間を超えることはできないというハイデガーの思想からの影響を強く受けている (Heidegger [1935] S. 17, 438; 原・渡辺訳 [1971] 87, 662 頁)。

65) Gadamer [1975] S. 284-285; 饒田・巻田訳 [2015] 471-472 頁。

66) 清水・木前・波平・西坂訳 [1991] 412 頁; Gadamer [1975] S. 289; 饒田・巻田訳 [2015] 479 頁。

えられる。

ガダマーの解釈学は解釈学の歴史に新局面を開いたとされている<sup>67)</sup>この、ガダマーの解釈学に対して、ハーバーマスをはじめとして、様々な論者から批判が加えられている。その文脈の中では、解釈学は実証主義と比較されながら議論されることが多い。この実証主義の思考の下での、社会科学が学問的な対象とする価値判断を伴う命題や歴史研究などの検証については議論の余地がある。また、会計の研究手法として実証的アプローチを採る研究があるが、この「実証」という術言には、どのような概念が含蓄されるのか、解釈学と実証主義の比較を通して、その一端を明らかにしたいが、これは今後の課題としたい。

#### 引用文献および参考文献

- Comte, A. [1949] *Cours de philosophie positive : Discours sur l'esprit positif*, t.1 & 2, Librairie Garnier Frères (霧生和夫訳 [1970]「実証精神論」清水幾太郎編『世界の名著 36 コントスベンサー』中央公論社, 140-233 頁).
- Dilthey, W. [1957] “Die Entstehung der Hermeneutik”, *Wilhelm Dilthey Gesammelte Schriften*, Bd. V, Vandenhoeck & Ruprecht, S.317-331 (久野 昭訳 [1981]「解釈学の成立 (一九〇〇年)」, 『ディルタイ 解釈学の成立』以文社, 5-41 頁).
- Gadamer, H. G. [1960] *Wahrheit und Methode : Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, J. C. B. Mohr (轡田 収・麻生 健・三島憲一・北川東子・我田広之・大石紀一郎訳 [1986]『真理と方法 I 哲学的解釈学的要綱』; 轡田 収・卷田悦郎訳 [2008]『真理と方法 II 哲学的解釈学的要綱』; 轡田 収・三浦國泰・卷田悦郎訳 [2012]『真理と方法 III 哲学的解釈学的要綱』法政大学出版).
- Giddense, A. [1993] *New rules of sociological method: a positive critique of interpretative sociologies*, 2nd ed., Stanford University Press (松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳 [2000]『社会学の新しい方法基準 [第二版] - 理解社会学の共感的批判 -』而立書房).
- Habermas, J. [1982] *Zur Logik der Sozialwissenschaften*, Suhrkamp Verlag (清水多吉・木前利秋・波平恒男・西坂 仰訳 [1991]『社会科学の論理によせて』国文社).
- Heidegger, M. [1935] *Sein und Zeit*, Husserl-Freiburg, E. (Hrsg.), Sonderdruck aus: “Jahrbuch

---

67) 清水・木前・波平・西坂訳 [1991] 408-409 頁。

- für Philosophie und phänomenologische Forschung*”, Band VIII, 4. Aufl., Max Niemeyer (原佑・渡辺二郎訳 [1971] 『世界の名著 62 ハイデガー』 中央公論社).
- Lavoie, D. [1987] “The Accounting of Interpretations and the Interpretation of Accounts: The Communicative Function of “the Language of Business””. *Accounting, Organizations and Society*, Vol. 12, No. 6, pp. 579-604.
- 青柳文司 [1976] 『会計学への道』 同文館出版。
- 青柳文司 [1991] 『会計学の基礎』 中央経済社。
- 伊藤嘉博 [1986] 「企業予算論・その現象学的展望」『会計』, 第 130 巻, 第 6 号, 739-750 頁。
- 伊藤嘉博 [1987] 「解釈的予算研究の批判的展望－解釈学的リサーチへの脱皮」『企業会計』, 第 39 巻, 第 7 号, 790-795 頁。
- 國部克彦 [1999] 『社会と環境の会計学』 中央経済社。
- 下田直春 [1978] 『社会学的思考の基礎』 新泉社。
- 新村 出編 [2018] 『広辞苑 第七版』 岩波書店。
- 中野常男 [2000] 『複式簿記会計原理〈第 2 版〉』 中央経済社。
- 中野常男・清水泰洋編著 [2014] 『近代会計史入門』 同文館出版。
- 永野則雄 [1992] 『財務会計の基礎概念 会計における認識と測定』 白桃書房。
- 渡邊二郎 [1994] 『構造と解釈』 筑摩書房。